

論文要旨

論文題名：出版業におけるデジタル化に関する研究

指導教授：金容度教授

法政大学大学院 経営学研究科 経営学専攻

修士課程 企業家養成コース

田村 明史 (11Q5253)

不況に強いと言われてきた出版産業であるが、その神話も崩れ 1996 年をピークにマイナス成長を続けている。たとえば書籍の場合、販売数に関しては、1988 年をピークに減少が続いている状況であり、1980 年代に成長期から成熟期に変化したと考えられる。

そういった状況下において、1980 年代半ばあたりから、先進的な出版社が中心となって、出版技術を活用したデジタル化を徐々に行い始め、紙以外の電子メディアが登場した。そしてインターネットの普及に伴い、電子書籍等へのチャレンジも行われている。

本論文の課題は、出版業におけるデジタル化の進展に着目して、電子出版の戦略の方向性を明らかにすることである。約 30 年間における出版業界の電子出版に関する活動をメディアやサービスの形態によっていくつかのタイプに類型化し、各タイプの代表的な企業の事例研究を行う。事例研究の方法としては、各企業のホームページやその企業に関する書籍・雑誌・新聞記事、有価証券報告書等による調査を行うと共に、そのタイプに関して、経営資源・マーケティング等の複数軸で分析を行い、その関連性や共通点・変化の有無等を見つけ出す。

電子出版に関する先行研究は少ない。主な先行研究として、電子出版全般に関しては、「電子出版研究の方法論」(植村、2003 年)、1980 年代に関しては、「電子出版と出版学」(下村、1992 年)、そして、1990 年代に関しては、「1990 年代の電子出版」(合庭、2000 年)、「90 年代の電子出版研究」(植村、2002 年)、「1990 年代の出版技術」(森、2000 年)などが挙げられる。しかし、いずれの先行研究も、出版業のデジタル化の開始から、今日までの約 30 年間の総合的な分析および事例分析は行っていない。

本論文の第 1 章では、電子出版の 5 つの類型化を行い、各タイプの事例を分析するための分析軸として「出版産業構造とビジネスモデル」、「企業家と企業組織」、「技術」、「流通販売」の 4 軸を設定する。

第 2 章から第 6 章では、5 つの類型化した電子出版の代表的企業事例を、4 つの軸で分析し、それぞれの特性を考察する。「電子編集制作」の事例のアスキーからは、出版工程のデジタル化の進展に関することが、「パッケージ系電子出版」の事例の岩波書店からは、パッケージ系の電子メディアの特性が、そして「オンデマンド出版」の事例のブックニングから

は、オンデマンド印刷を利用した「無在庫」の出版モデルの特性がそれぞれ明らかになる。さらに、「コンテンツ系電子出版」の事例のインプレスからは、デジタルコンテンツに関するネットワーク出版の特性が、「新業態・新チャネル」の事例のアマゾン・ジャパンからは、新業態のプラットフォームモデルの特性が明らかになる。

第7章では、4つの軸で分析してきた事例研究の結果を、「戦略分析マトリックス」の表にまとめ、各タイプとの関係性や方向性を考察する。

最後の結論では、戦略分析マトリックスの結果を基に総合的な視点で、今後の出版社の電子出版に関するデジタル戦略を導出した。

まず、「企業家と企業組織」の分析軸からは、将来の電子出版に関する中長期のビジョンを掲げ、新組織を用意し、具体的で実現可能なビジネスモデルやアクションプランまで落とし込み、そのプランを着実に実施する上で、企業家の役割が極めて重要であることが明らかになった。

そして、残りの分析軸である「出版産業構造とビジネスモデル」、「技術」、「流通販売」の分析結果から、4つのデジタル戦略が抽出できた。

第一に、デジタル化されたコンテンツをワンソースマルチユースで、インターネットを活用して課金からデジタル配信まで実施できる「プラットフォーム戦略」である。第二に、紙の出版物やデジタルコンテンツ等、様々な商品カテゴリーを提供し、豊富な品揃えを可能にする「ハイブリッド戦略」である。第三に、デジタルコンテンツ等の非再販商品を、できるだけ適正な低価格で販売する「価格戦略」である。第四に、インターネットを活用したデジタル配信で、商圏を意識することなく顧客接点を増大させる「グローバル戦略」である。

本論文は、事例数が少なく研究調査範囲も狭い。そのため、これらの戦略は、企業の外部環境・内部環境によって、その有効性が変化する。しかし、いくつかの組み合わせあるいは、一部の戦術的な内容を切り出すことによって、効果的な電子出版に関するデジタル戦略の立案が可能である。そして、出版業は今後、デジタル化が加速すると、業態転換によりコンテンツ産業へシフトしていく可能性が高まり、出版業自体の本質的な役割が問われ始めるだろう。